回転まぶしの向こうがわ

はせがわ　ともこ

プロローグ

梅雨のころだったろうか。

「私、桐生出身なんです。」

この一言が、思いもよらないご縁を結ぶことになる――。

生まれ育った群馬県桐生市から遠く、鹿児島県の徳之島に家族で移住して四年目の春。

私はオンラインのお蚕さん飼育プロジェクトに参加していた。

昨秋の講座で初参加し、春講座で育てるのは二度目になる。同時に冬から、シルク成分を使ったハンドクリームの開発プロジェクトにも混ぜてもらっていた。

冒頭の「思いもよらないご縁」の主人公、「絹遊塾工房 風花」の板野さんとの出会いは、お蚕さんに興味のある人が

集うオンライン交流会での自己紹介がスタートだった。
グループに分かれて自己紹介をしていたはずが、地元の話に花が咲いてしまった。
すると板野さんが、
「私、あなたのお母さん知ってるかも。」
と言う。
なんと、私の母が憧れの先輩だったというのだ。
は？
憧れ？？？？？
齢七十を過ぎ、六十代で人工股関節にして以来、大事をとりすぎてプックプクになってしまった母。
ソフトボールをしていた中学時代の栄光は聞いたことがあるけど…。
でも、今の母からは想像が……難しい。
ところが板野さんは「いまも」母に憧れているという。
えー……？
母は、中学時代のソフトボール仲間の中で、今もそんな存在だったのか。
お蚕さんとは全然関係のない話だったけど…！
それをきっかけに、実際に親子三代で工房にお邪魔することになった。

回転まぶしのこっちがわ

ずっと謎が残ったままだった。

養蚕家は、お蚕さんが繭になるときに「回転まぶし」というものを使うそうだ。

理屈は聞いた。

お蚕さんは上へ登っていく習性がある。回転まぶしは、お蚕さんたちが上の方の気に入った部屋に繭を作ると、その重みでくるんと回転し、空いた部屋が上になる。

そうすると、まんべんなく部屋が埋まっていく——という仕組みなんだそうだ。

理解はしている。

でも、オンラインでは細かなところまでは見えない。

やっぱり何か、どこか、わからないモヤモヤが残るのだ。

この夏、義実家の宮城県からスタートし、新潟県佐渡島にも渡り、実家の群馬に行き、そこからまた宮城に戻る途中、福島県の会津へ。

各地を見て回った。

古民家や民俗資料、お蚕さんの安全を祈る灯籠がある神社、お蚕さんを祀った神社にもお参りした。

いろいろな道具を見たけれど、やはりどれも、実物の大きさを直に感じられることはものすごくいい。

でも、展示されているものは触れるものが少ない。

目の前で触れて、動かせるものはもっと少ない。

動きを見てみたかったそれらが、揃っている場所に行けた。

いろいろあると聞いてはいたけれど、やりたかったことが揃っている工房が本当にあるとは思っていなかった。

しかも、母と行くことをとても喜んでくれる人が、それをしているとは。

昨年秋にお蚕LIFEが始まって以来、不思議と「つながりたい」と思っていた所へ、ものすごい速さでつないでいく見えない糸の存在を感じていた。

けれど、こんなにまとまって一気に手繰り寄せるなんてことは、全く想像していなかった。

真綿をつむぐ器械。

よりをかけていく器械。

織り機も何種かある。

糸は色とりどり。太さも、よりの強さもよりどりみどり。

糸を合わせて撚っていく手作りの器械。

障害があっても使えるように工夫された「フラミンゴ」という織り機にはびっくりした。

次から次へと、やってみたかったあらゆる作業が並べられている。

ただ。

今はまだよくわかっていなかったものが、回転まぶし。

なぜこんなに気になるのかわからない。

が

とにかく気になるのだ。

そして、それが入ってすぐに目に入ってきた。

でかい！！

大きさの数字は聞いていたけど、でかい！

もちろんフレームも重そう。

え、このまぶし、どうやってつけるの？　外すの？

結局、眺めて終わったのだけれども、実物を目の前で見て、しかもちょうど糸を吐いているお蚕さんがいるじゃないか！

この帰省の旅があるからと、夏は飼育を見送った私は、完全に白くてムニムニしたお蚕さんに飢えている。

「ここに居たぁ……！」

ずっと眺めていたい衝動に駆られていた。

やっと実物の回転まぶしが目の前にあるというのに、その中で糸を吐くお蚕さんに目を奪われている。

回転する縦糸

今回、私たちが工房で触らせてもらった織り機は「フラミンゴ」。

縦糸をかけるときに、その部分を回転させる。

その動きが、形が、まんま「フラミンゴ」。

すごいネーミングだと思う。

ちょっとやり方を教えてもらったら、長男も次男も黙々とどんどん作業を進めてしまう。

あっという間に百三十センチを超える長さの布を織り上げて、

「まだやりたい」
という。

……三時間も経っているのだ。実は。

真剣な顔で、この日は頭に「桐生八木節まつり」の限定手ぬぐいを巻き、職人のような目で織っている十歳の少年二人。

半世紀以上前の中学時代の思い出話に花が咲く母と板野さん。

まだ糸を吐く前の、食べ盛りの5齢のお蚕さんを気にしながらも、草木の色で染めた糸を手に取りたい私。

たぶん、全員が時間の流れを感じていない。

「……もうそろそろいいんじゃない？」

そう。

四人家族＋母で工房にお邪魔していたのだ。

完全に夫の存在を放置していた、気がする。

夫は夫でたぶん興味深くいろいろ見ていたはず…だよね？

それぞれが思いのままに夢中で過ごすうち、気がつけば三時間が経っていた。

その間、私はあれこれ、これまでのことを肌で感じていた。

私の先祖は。

曽祖父は鉄工所をしていた。

この桐生の織物の機械化に貢献した人だと聞いている。

祖母もその話を、物心ついたころの私に曽祖父のことを聞かせながら、和裁の内職をしていた。

私は針を持つことや、物を作ることは覚えた。

でも、自分のルーツに触れることをあまりしてこなかった。

しいて挙げるなら、二十代半ばに着物が急に着たくなり、知り合いにお願いして着付けを教えてもらったくらい。

それが四十代半ばの今。

一気に来た。

一年前、

「やっぱりお蚕育てたいなぁ……」

の一言から始まったオンラインプロジェクトへの参加は、目の前で糸や織りの専門家と母をつないだ。

その数分後、母はさらに別のソフトボール仲間をつないだそうだ。
あれよという間にひろがっていく。

育てたお蚕さんの糸は、私から板野さんへ。
板野さんから母へ。
母から、また昔の仲間へ。

長男は養蚕家になりたいというが、織りに夢中な姿を見ていると、こっちでもいいんじゃないか、機械の道もあるんじゃないか、とも思う。

私は私で、この織り機が、島のB型支援の施設を必要とする人たちの新しい選択肢にならないかな、と考えている。
島の知り合いに話してみようか。

春に育てたお蚕さんたちが残してくれた数粒の繭で、まともな糸一本作れなくて、なんだか申し訳なく思っていた。

でも、それだからこそ。

今、器械により目の前できれいに均等な糸として紡がれ、織り上がっていく糸を見ると、何とも言えない気持ちになる。

効率化、低コスト、労力を少なくすること。
一方で、手作業は時間がかかり、集中力も必要だ。

それでも、そこには心地よい疲労感と、豊かな気持ちがある。

曽祖父が機械化に関わった桐生で、私は今、手で糸に触れ、子どもたちは織り機に夢中になっている。

機械か、手仕事か。

そんな単純な話ではない。

行ったり来たり。

縦糸をかけるフラミンゴが回転するように、人の縁も回れば、気持ちもめまぐるしく回る。

回転まぶしの向こうがわ

「島に帰ったら、お蚕さんについてや糸を作る難しさ、知らなかった世界を見るきっかけを作りたいんです。」

そう板野さんに話した。

「…あっ！　これ！！」

「これと、これも！！」

「これもいいよ！」

手に箱を渡され、その中には真綿とモール、茜染のキビソ……羊さんの作り方が書かれた紙。

「来年の干支は羊だから、みんなで作って、ね！！」

凄いエネルギーだ。

板野さんに、私は何をしたら喜んでもらえるだろうか。

どんなことがお礼になるだろう。

それは、

回すことだ。

きっと。

ほら。

「来月十七日（土）にマルシェするんですけど、出店しませんか？」

島の知り合いから声がかかった。

お蚕さんの何かで参加してほしいそうだ。

「真綿から糸を作ってみる？

その糸で三つ編みのミサンガを編むか……まだ十月だけど、来年の干支の羊を作って先取りしちゃう？」

私の提案に対する返事が想像できるだろうか。

「え〜、羊！めっちゃいいですね！！早取りしないと、もういきなり年末になりそう」

回すしかなさそうな風が吹いている。

母は私に巻き込まれたかたちではあるものの、
私から板野さんへ。
板野さんから母へ。
母から共通の仲間へ。
子どもたちには、未来の選択肢が。
私は預かったものを回して、その先へ紡いでいく。

これらはどこかで交差して、いつの間にか織物になっていく。

回転まぶしを覗いた向こう側は、とんでもなく広く、長く。